thema イタリアの事例を参考に、農村と都市との新たな共存的関係性を探る研究

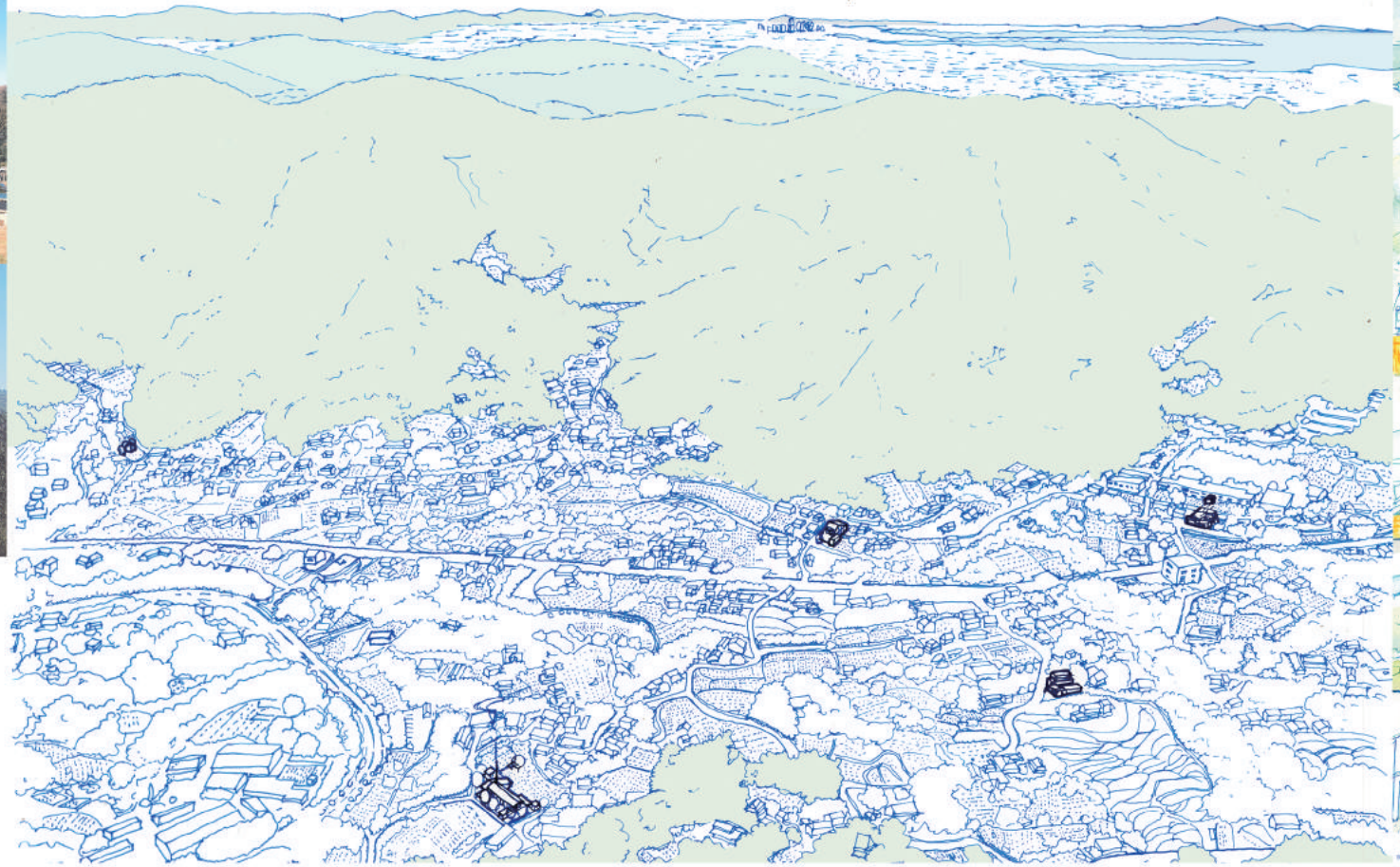
「程よい遠さ」が価値になる都市近郊農村

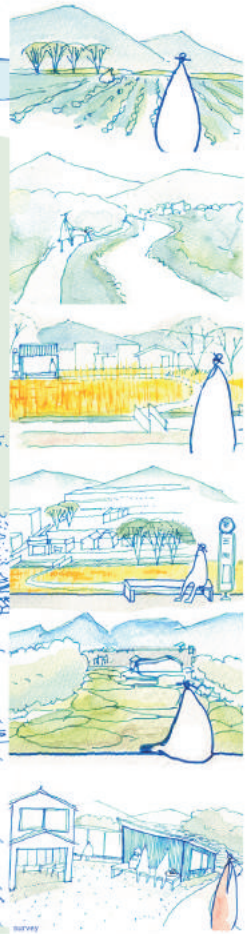
これからの農業の在り方や、都市で暮らす都市民にとって憧いの場となるような場所・ライフスタイルを提案し、都市民と農村民の両方向の視点から考えられる都市近郊農村のあり方を提案する。

back ground

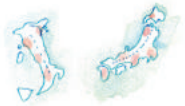
イタリアへの交換留学

留学中、都市近郊の農村に出かける機会があった。イタリアでは地方のその土地らしさが価値であり、農村で過ごす時間が都市民にとって憧いであるということに感銘を受けた。





comparison



地形によって育まれた多様な文化

イタリアは南北に細く長く、それを二分するように脊梁山脈が通り海岸線が長い。そのため日本同様に地理的な分断から地域ごとに固有の郷土食や文化が育まれ多様性が保たれやすいと言える。

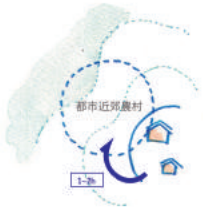
過疎と荒廃を経験した農村の歴史

日伊両国とも、第二次世界大戦での敗戦後、1960年代の急速な工業化の中で都市への人口流入が続き農村が衰退していった。その後日本では都市化が進行し続けたがイタリアでは1970年から農村回帰が始まり地方の再生に進展していった。

proposal

都市近郊農村としての価値を認識して

都心部から近いところで自然や田園などが住宅と相まりながら共存する世界は都市近郊農村の良さであり価値であると言える。都市近郊であるため、住む人、訪れる人に多様なライフスタイルを提案ができると考える。



(i)産業としての農業

飲食店に届ける野菜の鮮度の良さ、運送費用のコストや時間の削減が挙げられる。田畑が小さいことをプラスに捉え、地域に手間のかかる有機野菜に付加価値をつけて生産することが可能になる。

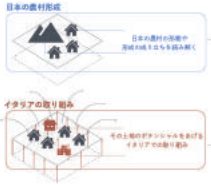
(ii)レクリエーションとしての農業

また野良仕事や陶芸などの生産の現場を体験する機会を設けることによって都市民のレクリエーションになりうる。都市の近郊にある為、観光に過ごす家や、長期休暇に旅行するほかいとしても考えられる。

(iii)環境保全としての農業

遠くを眺めると山が見え、森や畑が住宅と相まりながら広がっていく。日本の原風景ともなりうる光景が都心のそばにあり、簡単に足を運ばすことができるということが価値でになりうると考える。

porpose 日本の都市近郊の農村にイタリアの取り組みを順応させる

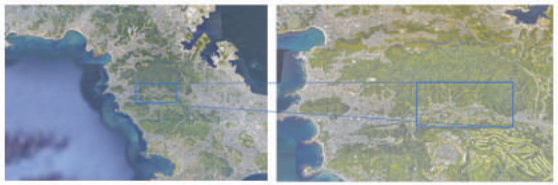


イタリアの農村での取り組みを参考にする。文化も土地の形成も違うエリアを比較するため、日本とイタリアの農村の続りなちをそれぞれ分析することでその土地に順応させながら提案することができると考える。

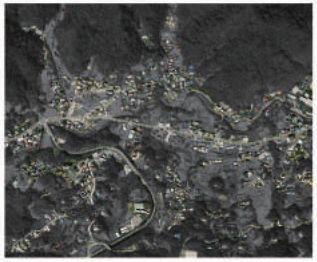
site

神奈川県三浦郡葉山町上山口

神奈川県の三浦半島の横須賀と逗子の間に挟まれた谷地に位置し、葉山町にある唯一の市街化調整区域。住宅地、農地が広がり日本の里100選にも選ばれた棚田があるエリアでもある。



上空写真からも建築と森や畑が相まって存在していることがわかり、都市近郊農村として3つの軸が考えられる。



(i)小規模多品種農業

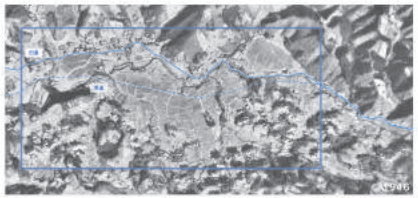
もともとは棚田が広がっていたエリアであったため、未だに土地も棚田だった頃の地形が残っている。

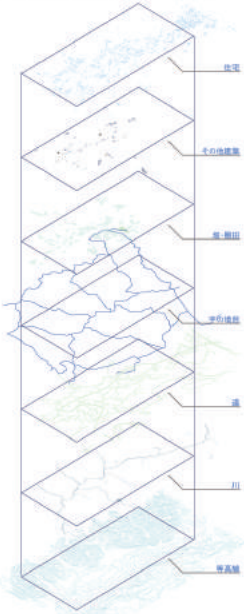
(ii)葉山のブランド力、海の葉山と山の葉山。

葉山といったら海のイメージが先行しており、今回はその海のイメージに乗乗して山側の葉山として提案していく。

(iii)生活と密接する森と畑

左の写真は、森や畑の彩度を落としたものである。写真からも人々の生活に森や畑が入り混んでいるということがわかる。





昔は旧道沿いに住宅が広がっていたが、新道が出来てからは旧道沿い以外の開発がすすんだ。小字ごとに集落が集まっていたため、谷戸に建築が集中して伸びていることがわかる。最近は空き家も目立つようになっている。

地図からは新道沿いに住宅以外の建築が集まっていることがわかる。日蓮が貴旧道沿いを通ったと言われており、神社と寺がいくつか建立されている。さらに上山口には庚申塔が多く存在しており、昔から信仰深い地域であったことがわかる。

山の形態が違うため上山口の北部はＶ字谷が多く谷戸田が、南側は平らな棚田が、広がっていた。そのため日照時間や風量、畑の形態も南北で違いがある。

地域の小字（こあざ）や小名は地域の地形、先祖、職業などからつけられている。それらはさらに江戸時代に入ると細分化され周辺住宅ごとに５人組としてまとめられ、冠婚葬祭などを５人組で行った。

７世紀ごろ相模国の海路御浦郡から海路で房総半島の上総国に運ぶための三浦御半島を横切った古東海道が通っていた場所であり、江戸時代の流賀道とも重なる。そのため宿屋が幾つか存在していた。現在のラブホテルはその名残である。

谷戸田から中央に伸びる下山側に水流が集まり、東から西に流れている。南側の山麓には湧き水が出る場所もあり、木古庭には三浦半島唯一の滝もある。昔は御用邸の水もここから引いていた。

逗子の境目となる北側の山々と横須賀との境目である南側の山に囲まれ谷地になっている。北部山地は岩盤帯である。南部は活動層上の破砕帯であるため、岩石や土砂が堆層する過程で隙間を通って湧き水が出ることがある。

survey

葉山景観まちづくり研究会に参加。

修士の一年間葉山景観まちづくり研究会に参加し、まちの人へのインタビューやまちあるきを行った。活動を通して街としての提案やプロジェクトの敷地選定をすすめた。

layout design

あるものを生かして、無いものを作る。

まちへデザインを少しづつ加えていく。まちで過ごす経験を重視したため、まちの景観や活動を意識しながら配置計画を進めた。建築自体も、あくまでまちの部分であるという考えのもと設計を進めた。

軸で考える

旧道新道沿いに計画する

面で考える

エリア一帯で価値を高める

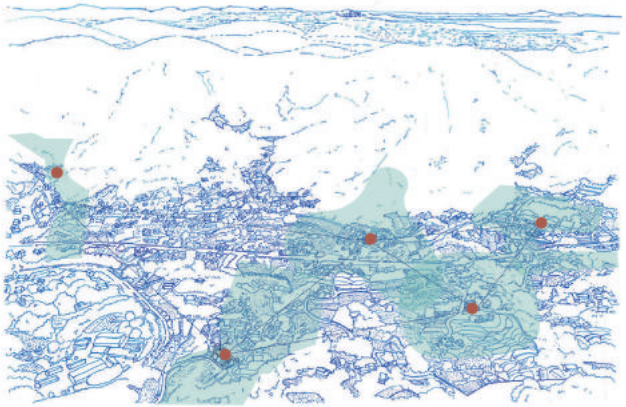
点で考える

建築を分散配置

部分で考える

各要素をシームレスにつなぐ緑地

「まちを経験」するきっかけを作る



thema

「都市近郊農村としての上山口」

「主体性のある建築ではなく、まちの部分となる建築を。」

❶ 食を手段として考えられるアクティビティ

上山口はもともと農産業で生計を成り立たせてきたため、都市近郊農村として食という切り口から取り組んでいく。

- 食育・棚田に参画するワークショップ
- 地元農家の野菜や葉山牛の販売所・サテライトオフィス
- 棚田の前に位置した広場・新鮮野菜を配達するシステム
- 貸し農園・畑塾(野菜作りを地元の人に教えてもらう)

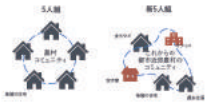
❷ 都市近郊農村で考えられるシェアの考え方

利用する人も時間帯も多様であるため、場所・もの・時間のシェアをすることによって活動の選択肢が増える。

(i)2拠点あることの価値

「シーンによって場所を選べる」

(ii)昔からあった農村共同体を現代の利用者に合わせて再解釈



「時間・場所・価値のシェア」

場所(サテライトオフィス/共有の図書スペース/畑など)

もの(キッチン /ランドリー/車/本/アイロン台/野菜など)

時間(料理/手芸/宅飲み囲炉裏/子供を見る時間など)

❸ まちやど(まちに分散したホテル)

そのまちの住民になったかのような経験をしながら滞在することへの価値。

- まちに分散した客室(空き家を改修)
- まちやどのカウンター
- 朝食会場(地元の食材を使った店)

renovation

上山口のリノベーションプロジェクト

既存
住宅、倉庫 ×2

提案用途
まちやどの朝食会場、まちやどの部屋とドミトリー、ワークショップスペース、囲炉裏を囲む宅飲みスペース

1

地域民と都市民のために中心となるエリアをリノベーションする。

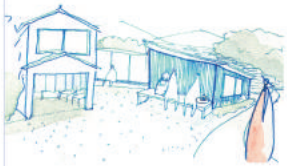
propose

まちやど（分散型ホテル）の提案

- まちに分散した客室(空き家を改修)
- まちやどのカウンター
- 朝食会場(地元の食材を使った店)

そのまちの住民になったかのような経験をしながら滞在することの価値を提案する。機能を分散配置することでまちを歩く必然性を作り、経験を提供する。

まちの中心に広場を設計する



上山口の象徴となる棚田、神山神社、公民館が位置している場所の中心に設計する。公民館の前に開かれたたまり場を、3棟の間に宿泊者用のセミプライベートな小さな広場を計画する。

diagram

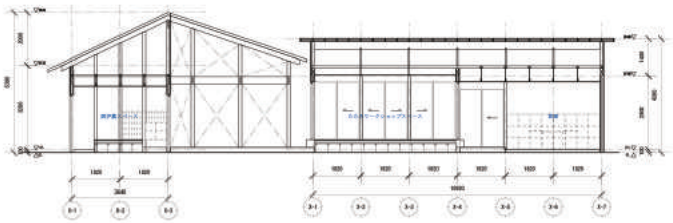
上山口の中心地を再設定

現在、棚田の前にはこの地へ訪れてきた人が滞在する場所や要素がないため、訪れてきた都市民や地域民に開かれたエリアを提案したい。

公民館よりの広場には開かれた溜まり場を、改修後の建物と建物の間にはここにステイする人のために開かれたセミプライベートな空間を設計する。

上山口の象徴である棚田の前に都市民の集えるスペースを計画する。

1st plan
scale=1:100



section
scale=1:100

new construction

サテライトオフィス

提案用途
野菜の栽培、収穫、乾燥、保存をする場、
サテライトオフィス

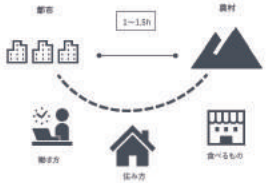
機能
ワーキングスペース、ミーティングルーム、宿泊スペース
トイレ、シャワールーム、土間スペース、倉庫 etc

2

シーンによって働く場所、過ごす場所を選択する。

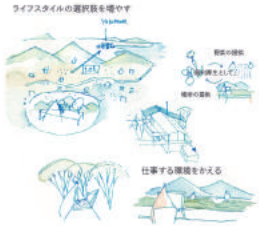
propose

サテライトオフィス



都内の仕事場とは別に働くことができるサテライトオフィスを提案する。最近はパソコン一つで仕事ができるようになった。豊かな環境、変化する景色の中で働くのは気持ちがいいかもしれない。

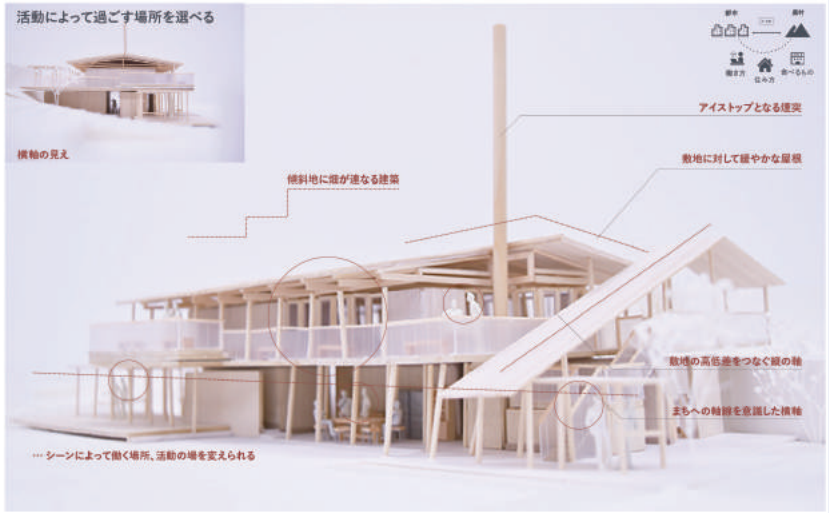
「利便性 < 豊かさ」の時代到来？

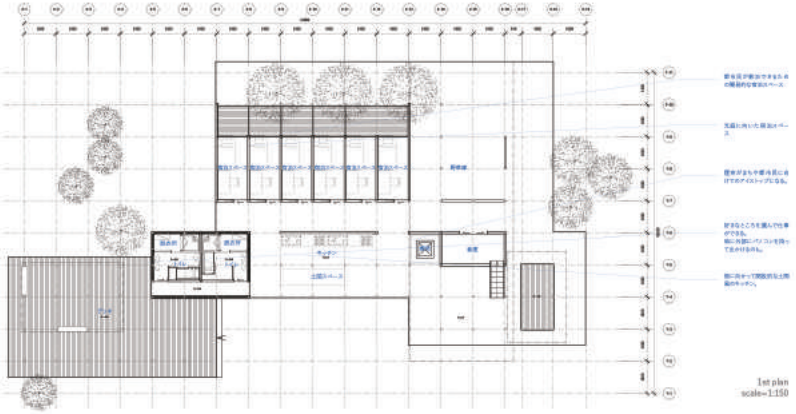


地域長と場所をシェアするだけでなく、ここで育てた野菜を会社に直送するサービスを提供する。自分が食べるものの工程を見ること。地域の産業に参画すること、産業の収入安定に効果を置く。

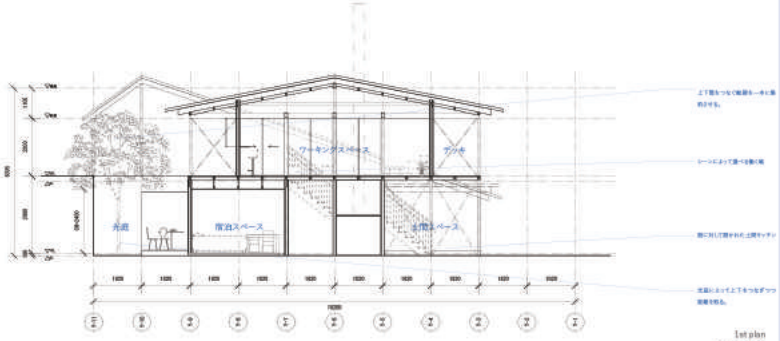
diagram

近畿インターチェンジと湘南国際村（研究機関などの施設）との中間に位置している。都市にある会社の 2 拠点目のサテライトオフィスとしての機能があるため就望がよく都市との関わりを保ちながらも農村部に位置することの場所に提案する。





1st plan
scale=1:150



1st plan
scale=1:100

new construction

新５人組のシェアスペース

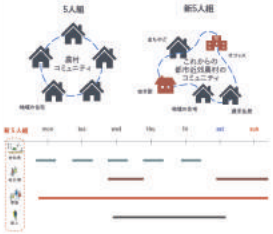
提案用途
まちやどのオフィス、
まちやどの受付カウンター、浴室、
シェアキッチン、シェア図書スペース、
コインランドリー

3

かつて存在した農村の共同体を、今の時代に即して再編成。

propose

新５人組



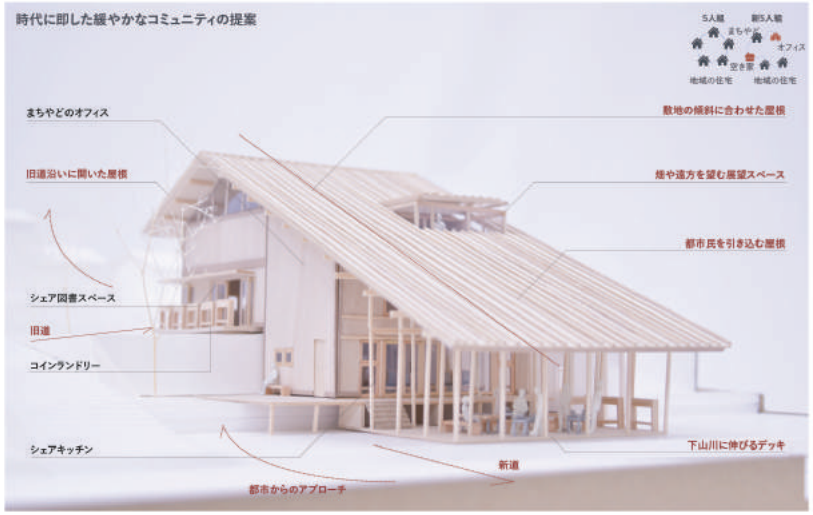
都市近郊農村という利点から多様の人が出入りすること、ライフスタイルが多様化していることに着目し、かつてあった五人組を時代に沿わせて再定義したい。

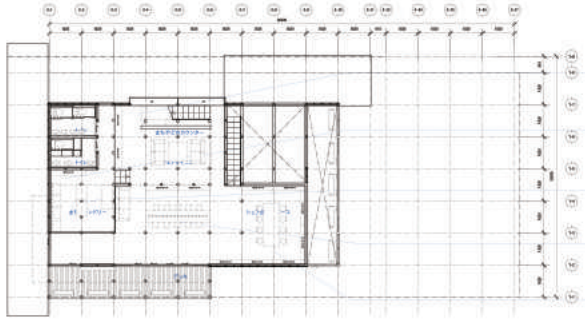
場所・もの・時間のシェア

都市近郊農村での 2 拠点での生活を提唱していく。場所・もの・時間を共有をすることで活動する場所の選択肢が増える。そんな未来もうすぐそこまで来ている。

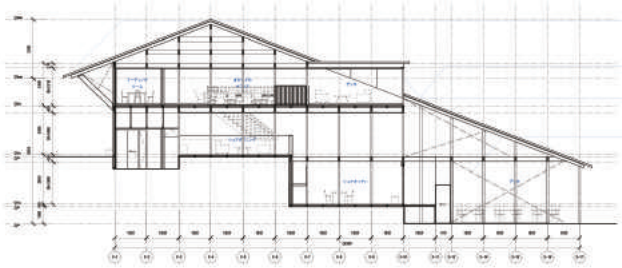
diagram

新道と旧道の間を、川と都を、つなぐ緩軸となる建築を提案する。周辺に空き家が幾つかありまちやどの部屋として利用出来るということ。旧道沿いに面した建築を設計することで訪れた人へまちの住民になったような体験を促す。





2nd plan
scale=1:150



section
scale=1:150

renovation

石井牧場の販売所

用途
葉山牛の直売所、BBQ、葉山野菜の販売所

4

石井牧場の玄関口となる葉山牛と葉山野菜の販売所

propose

石井農場の入り口となる販売所

葉山牛を育てている石井農場の石井さんが丹精に育てた牛を地元民や顔の見える人に、販売したいとの思いから始まった販売所の実施設計のプロジェクト。すでに購入済みのボックスに内装、外装、配置計画を行う。

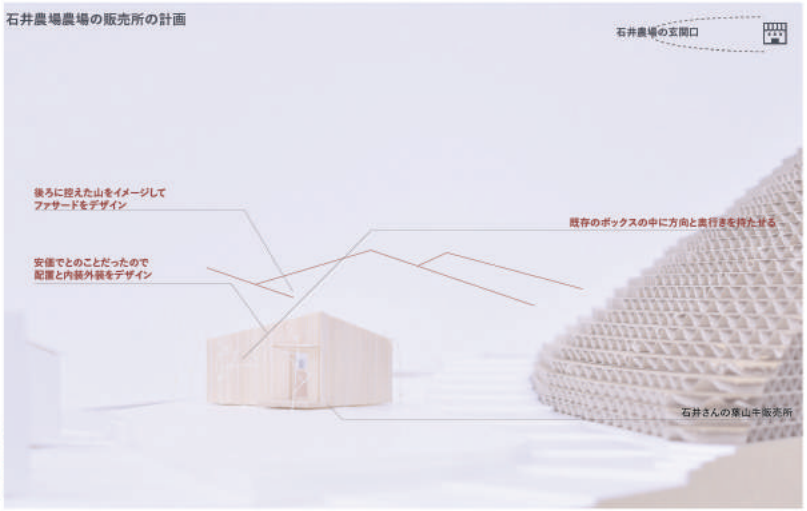
その場所に買いにいくという経験が価値に。

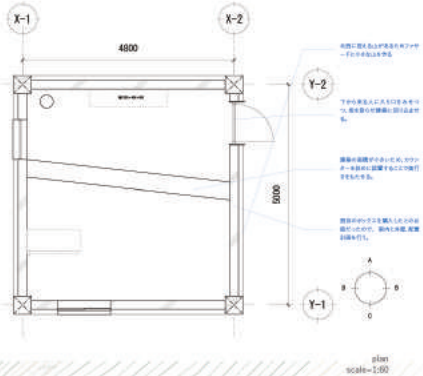
本提案では、その場所で育った葉山牛を生産者から購入し、その場で調理し口にするまでの工程をデザインし、この経験を助長するような風景の中にある建築を考えたい。

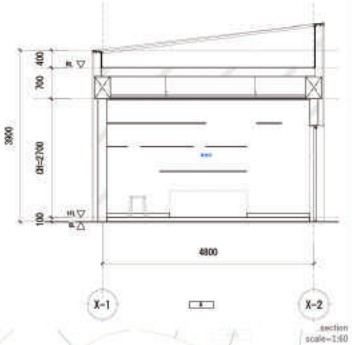
diagram

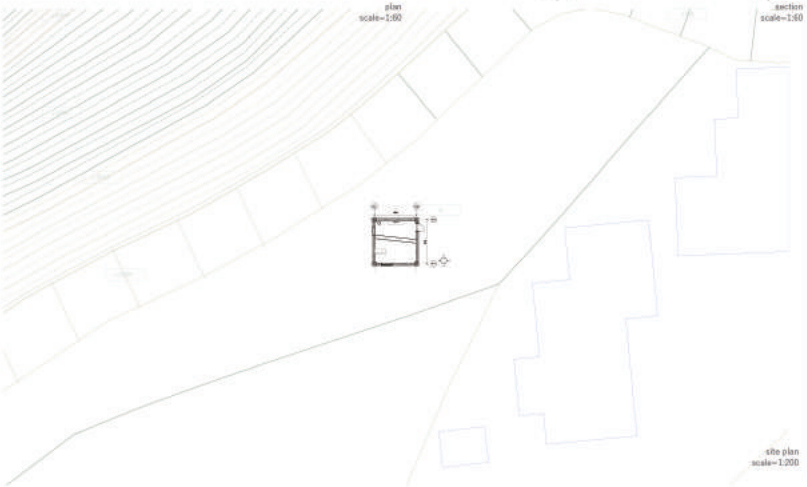
石井農場の入り口となる場所であり、谷戸の入り口部分、旧道から少し入ったところに位置しており後ろに山をひかえている。あえて新道沿いや旧道沿いに建物を作らずすこし奥まったところに作ることによって、来客する人に対して購入するまでの経験を作る。

石井農場農場の販売所の計画









new construction

上山口小学校前エリアリノベーション

用途
八百屋、食育教室、畑、温室、
野菜の直送場、搾油 する場

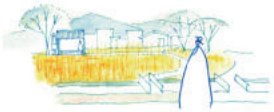
機能
キッチン、デッキ、八百屋、温室、搾油

5

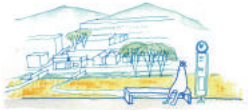
エリア一帯で上山口の質を高めていく。

propose

新道と旧道をつなぐ菜の花畑



旧道側から見る。



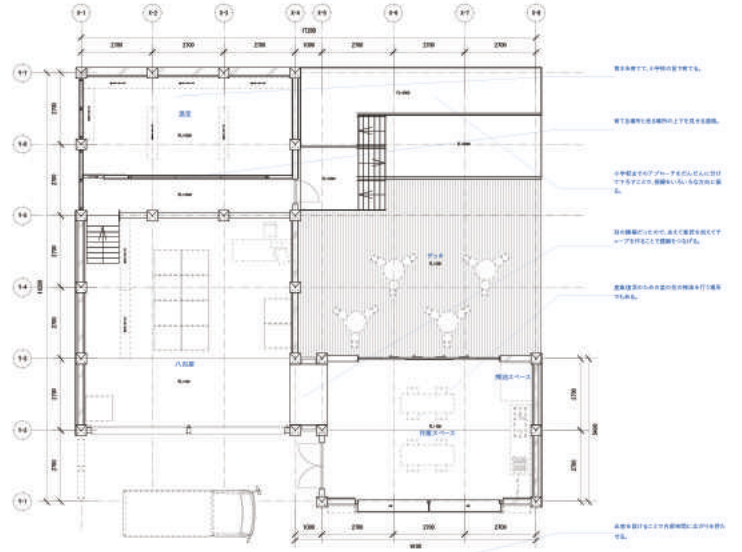
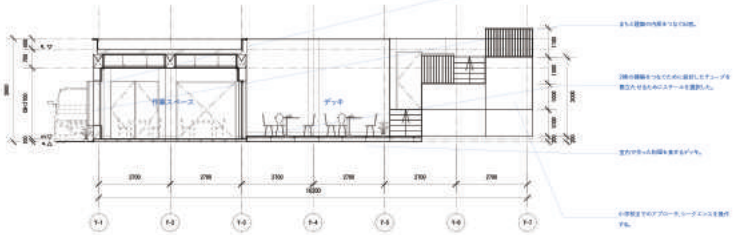
新道から旧道を臨む。

景観的視点として、菜の花畑を作り新道と旧道を結ぶ役割を持たせる。上山口では昔、菜種の搾油で収入を得ていた歴史があり、イタリアのスローシティ運動を参考に、昔ながらの産業の復活にとり組んでいく。

地域と小学校をつなぐ金井商店

小学校に対しては食育の授業や、給食室等の機能を持たせ、まちに対しては菜種の作業スペース、野菜の配送センター、八百屋の機能を入れることによって一帯となって上山口のボトムアップを行う。

diagram

小学校に対しては食育の授業や、給食室等の機能を持たせ、まちに対しては菜種の作業スペース、野菜の配送センター、八百屋の機能を入れることによって一帯となって上山口のボトムアップを行う。

食を手段としてエリア全体のポテンシャルをあげる